

花咲婆

渡会 克男 千葉県柏市 六十六歳

弟には『金送ル』、私には『野菜送ル』——母の一周忌、実家の納戸の茶箱の中に見つけた、すっかり色褪せた家計簿には毎月同じ記述があった。

当時、母が目を赤く腫らしながら内職で稼いだ収入の大半を弟に送っていることを知っていた私にとって野菜など感謝の対象外だったが、傍らの妻が短く嗚咽した。

「見て、『今日モ寒イ。少シ熱モアルガ、畑ヲ耕ス』だって。お母さんからの心尽くしだったのね。大根も白菜も人参も、それからおやつのでんぶだつて」

弟はお金の要る医学生、同棲などしている文学部のロクデナシは自力で頑張れと差をつけられても仕方なかったのだが、妻の涙が母の顔の皺を思い出させた。

母屋の脇の、野菜を育てるために母が竹林を開墾した畑——今、そこは春夏秋冬色とりどりの花を咲かせる立派な庭になっている。超遠距離恋愛……無事子供を独り立ちさせた母の願いは、若くして先立った十兆億土にいる夫に手向けるための花を咲かせる花咲婆になることだった。